

# 内野遺跡

—ほ場整備事業に伴う内野遺跡群第2・3次調査報告—

2000

福岡市教育委員会

# 内野遺跡

—ほ場整備事業に伴う内野遺跡群第2・3次調査報告—

2000

福岡市教育委員会



A区全景（東から）

## 序

玄界灘に面して広がる福岡市には、豊かな自然と多くの遺跡が残されており、これらは私たちの暮らしに潤いを与え、豊かな環境を作り出しています。私たちはこの環境を後世に引き継ぐことを目標としたまちづくりを行っています。

その一方で本市では都市基盤整備などの事業を行い、活力のある都市の建設を行っていますが、そのために一部の遺跡が已むを得ず影響をうけるのもまた事実です。福岡市教育委員会ではこれらの遺跡についてはあらかじめ事前に発掘調査を行い、先人の足跡を後世に残せるよう、その記録保存に努力しています。

本書は早良区内野地区における団体営闢場整備事業にもなう発掘調査のうち、平成10年度に調査を行った内野遺跡群第2次、第3次調査の成果を報告するものです。これらの調査によってこれまで発掘を行う機会が少なかったこの地域での中・近世における歴史を説くための貴重な資料を得ることができました。

本書が文化財保護への理解と協力を得られるとともに、学術研究資料の一環として御活用いただけましたら幸いと存じます。

最後になりましたが、事前協議、発掘調査から本書の刊行に至るまで、多大なご協力を頂いた農林水産局、内野西土地改良組合、地元の関係者の方々に対し、心より謝意を表します。

平成12年3月31日

福岡市教育委員会  
教育長 西 憲一郎

## 例　　言

1. 本書はは場整備事業に先だって、福岡市教育委員会が平成9年11月17日から12月11日にかけて行なわれた内野遺跡群第2次調査、及び平成10年7月19日から10月26日まで行われた内野遺跡群第3次調査の調査報告書である。
2. 本書に掲載した遺構実測図の作成は大塚紀宜が行ない、山田ヤス子、土生清史、吉田智史、矢野世利子の協力を得た。
3. 本書に掲載した遺物実測図の作成は大塚が行なった。
4. 本書に掲載した遺構写真的撮影は大塚が行なった。
5. 本書に掲載した挿図の製図は大塚が行なった。
6. 本書で用いた方位は磁北で、真北から6°21' 西偏する。
7. 本書で使用した遺構の呼称は、土坑をSK、溝をSDと略号化している。
8. 遺構、遺物番号は基本的に通し番号にしている。
9. 本書に関わる記録・遺物などの資料は福岡市埋蔵文化財センターに保管される予定である。
10. 本書の執筆・編集は大塚が行なった。

## 本文目次

第1章　はじめに	
1.調査に至る経過	1
2.調査組織	1
第2章　遺跡の位置と環境	2
第3章　内野遺跡群第2次調査の記録	4
1.調査の概要	4
2.本調査地点の確定	5
第4章　内野遺跡群第3次調査の記録	9
第1節　A区の調査	9
1.調査区概要	9
2.検出遺構・遺物	9
3.包含層その他からの遺物	16
4.石器	17
第2節　B区の調査	18
1.調査区概要	18
2.検出遺構・遺物	20
3.包含層その他からの遺物	21
第3節　C区の調査	22
1.調査区概要	22
2.検出遺構・遺物	22
3.その他の遺物	22
第4節　D区の調査	24
1.調査区概要	24
2.出土遺構	24
3.その他の遺物	26
第5章　内野遺跡群第2次・第3次調査総括	27

## 挿図目次

Fig.1	周辺遺跡分布図 (1/25,000) .....	3
Fig.2	第2次調査試掘トレンチ位置図 (1/4000) .....	6
Fig.3	A区SD-02、調査区北西部分実測図 (1/150) .....	9
Fig.4	A区遺構配置図 (1/400) .....	10
Fig.5	A区遺構実測図1 (1/40) .....	11
Fig.6	A区遺構実測図2 (1/40) .....	12
Fig.7	A区出土遺物実測図1 (1/3) .....	13
Fig.8	A区出土遺物実測図2 (1/3) .....	14
Fig.9	A区出土遺物実測図3 (1/1) .....	14
Fig.10	A区出土遺物実測図4 (1/1) .....	16
Fig.11	B区遺構配置図 (1/300) .....	18
Fig.12	B区遺構実測図 (1/40) .....	19
Fig.13	B区遺物実測図 (1/3、1/2) .....	21
Fig.14	C区SX-01実測図 (1/20) .....	22
Fig.15	C区遺構配置図 (1/200) .....	23
Fig.16	C区出土遺物実測図1 (1/3) .....	24
Fig.17	C区出土遺物実測図2 (1/1) .....	24
Fig.18	D区遺構配置図 (1/200) .....	25
Fig.19	D区SK-01実測図 (1/40) .....	26
Fig.20	D区出土遺物実測図 (1/1) .....	26

## 図版目次

卷頭図版 A区全景（東から）

- 図版1 1 A区遠景（北から）  
2 A区西側（北東から）  
3 A区SD-02（西から）

- 図版2 1 A区SD-03（北から）  
2 A区SK-05（南から）  
3 A区SK-05（南から）

- 図版3 1 B区遠景（南東から）  
2 B区全景（北から）  
3 B区SK-01（西から）

- 図版4 1 B区SK-03（北西から）  
2 C区遠景（南から）  
3 C区全景（東から）

- 図版5 1 C区SX-01（西から）  
2 D区全景（西から）  
3 D区SK-01（北から）

## 表目次

Tab.1	第2次調査試掘トレンチ一覧表 (1) .....	7
Tab.2	第2次調査試掘トレンチ一覧表 (2) .....	8

# 第一章 はじめに

## 1. 調査に至る経過

1997年度（平成9年度）から1999年度（平成11年度）の3ヶ年にわたる福岡市早良区内野西地区における団体営土地改良総合整備事業の平成10年度該当地内の埋蔵文化財事前調査願が福岡市農林水産局農業土木課から同市教育委員会埋蔵文化財課に平成9年10月提出された。

これをうけて埋蔵文化財課では、当事業地の北半部分が、内野遺跡群の範囲に含まれ、南半部分についても遺跡が存在する可能性があることを考慮し、事業対象地8.7ha全域を対象として、平成9年11月17日から同12月11まで、内野遺跡群第2次調査として試掘調査を行った。調査の概要は別章で後述するが、調査の結果、事業対象地の数地点で遺構、遺物を確認することができた。

その後両者の協議により、遺構の遺存する箇所については設計変更を行い、盛土による遺構の保存をめざす方向で調整が進められたが、已むを得ず遺構面が掘削される部分、及び道路、水路などの構造物施工箇所について発掘調査を実施することとなった。本調査は内野遺跡群第3次調査として平成10年7月19日から同10月26日まで行われた。

なお、第2次調査から第3次調査に至る一連の埋蔵文化財発掘調査の実施、及びその後の整理作業と本書の刊行に際しては、多数の作業員、及び農業土木課、それと地元の方々の多大な協力を得ることができました。心から御礼申し上げます。

## 2. 調査組織

調査委託 福岡市農林水産局農業振興部（現農林部）農業土木課

調査主体 福岡市教育委員会 教育長 町田英俊（前） 西憲一郎（現）

調査総括 文化財部長 平塚克則（前） 柳田純孝（現）

埋蔵文化財課長 荒巻輝勝（平成9年度） 柳田純孝（平成10年度）

山崎純男（現）

埋蔵文化財課第1係長 二宮忠司（前） 山口譲治（現）

調査庶務 文化財整備課 内野保基（平成9年度） 木原淳二（平成10年度）

宮川英彦（現）

調査担当 埋蔵文化財課 大塚紀宣

整理作業 橋口三恵子 橋口勝子

発掘作業

第2次調査

青柳美智子 伊藤ミドリ 井上八郎 牛尾秋子 牛尾二三子 海津宏子 金子ヨシ子 鶴田喜美枝  
中園登美子 西嶋彰子 土生ヨシ子 平川富美子 平川史子 広瀬梓 細川友喜 満田雅子 三好道子  
山口タツエ 山田ヤス子 山西人美 古岡勝野 岩見敏子 川嶋ツキエ 山尾タマエ 上生ヒサヨ  
高橋茂子 平川英子 石橋マサ子 鶴田佑子 稲所通泰 川岡涼子 長島光義 大鶴好子 倉光政彦  
矢野和江 川島京子

第3次調査

海津宏子 鶴田喜美枝 中園登美子 西嶋彰子 土生ヨシ子 広瀬梓 細川友喜 満田雅子 三好道子  
山口タツエ 山田ヤス子 岩見敏子 川嶋ツキエ 山尾タマエ 上生ヒサヨ 高橋茂子 平川英子  
鶴田佑子 稲所通泰 長島光義 大鶴好子 倉光政彦 牛尾與志輔 一宮義幸 鶴田洋子 上生清史  
古田智史 矢野世利子

## 第2章 遺跡の位置と環境

福岡市域の地勢は大きく東、南両方向に山系が延び、北は玄界灘に開くことができる。その中で、南側の背振山系から北に流れるいくつかの河川は中下流域で肥沃な平野を形成しながら博多湾に流れ込み、それらの平野は古くから多くの遺跡を育みながら今日までおよんではいる。

今回報告する内野遺跡群はそれらの平野のうち、福岡市西部に位置する早良（さわら）平野の上流域に位置する。国土地理院発行の2.5万分の一「背振山」の左上を基準として、東に343mm、南に40mmの位置にあたる。遺跡が立地する河岸段丘は室見川上、中流域両岸に広がる台地で、遺構・遺物はその台地に点在している。

早良平野は東を油山および油山から北に派生する丘陵によって、また西を背振山系から北に派生する飯盛・長垂山系によって周囲と明瞭に区別され、平野のはば中央を室見（むろみ）川が北に流れる、北に向かって扇型に開けた形状を呈する。この早良平野では下流域で有田遺跡群、藤崎遺跡群、西新遺跡群、中流域では飯盛遺跡群、吉武遺跡群、東入部遺跡群、浦江谷遺跡群といった、縄文時代・弥生時代から中世に至る集落遺跡が数多く見られ、この地域一帯が古くにはある程度のまとまった集合体を形成していたことが伺える。

しかし、これら中下流の様相と比較して、室見川上流域、およびその支流の小笠木（おかさぎ）川・椎原（しいば）川流域では、これらの河川によって形成された扇状地と河岸段丘が展開し、地勢的にも中、下流とは区別される。したがって、これら上流域では中下流の様相とは異なった遺跡群が展開する。以下、これまでの発掘成果に基づいた具体的な状況を概説する。

旧石器時代には遺物としてこれまで脇山A遺跡2次調査で細石核が、同3次調査で尖頭器が各1点出土し、また志水A遺跡1次調査でナイフ型石器が1点出土しているが、当該時期の遺構は未検出である。

縄文時代には脇山A遺跡で早期から晩期に至る遺物が出土し、5次調査では土壙・埋甕をはじめとした晩期の遺構群を検出している。同じく栗尾B遺跡、谷口遺跡でも同様の内容が検出され、脇山B遺跡では早期押形文土器が出土するなど、小笠木川・椎原川流域一帯に縄文時代に属する遺跡群が集中していたことが認められる。

対して、弥生時代には室見川上流域での遺構・遺物の分布は極端に少なくなる。遺構としては谷口遺跡でわずかに見られる程度で、そのほかには遺物が各遺跡で散見される程度である。

古墳時代にもこの地域での遺構・遺物の出土は少なく、古墳自体の分布も、室見川中流域で見られる群集墳の濃密な分布はこの地域ではみられず、早良平野全体の中で周辺部的な立場にあったことが伺える。

峯遺跡1次調査では、奈良時代と考えられる掘立柱建物跡が検出されており、その後中世には峯遺跡2次調査で13世紀から14世紀にかけての建物群が検出され、その他に脇山A遺跡4・5次調査で12、13世紀台の掘立柱建物跡、土塹墓群、同7次調査で14世紀から16世紀にかけての遺跡群が出土している。そのほか、各遺跡で中世の舶載陶磁器を含む中世の遺物が多く見られるが、この背景として中世背振山における上宮東門寺を中心とした山組織の存在が大きく、室見川上流域がこの背振山領の一つとなっていたこと、この地域一帯の灌溉開墾が中世に開始されたこと、さらに博多・聖福寺がこの地域に寺領を持っていたという、密接な関係もある。その結果、室見川上流域の遺跡では比較的まとまった量の遺構・遺物を認めるところになる。

### 参考文献

貝原益軒『筑前国統風土記』

吉良国光「背振山の所領支配と村落－筑前国早良郡脇山を中心として」『九州史学』特集号 1987  
発掘調査内容については各報告書を参照して頂きたい。



Fig. 1 周辺遺跡分布図 (1/25,000)

## 第3章 内野遺跡群第2次調査の記録

### 1. 調査の概要

内野遺跡群第2次調査は同第3次調査に先行する試掘調査として位置付けられる。調査対象地となる早良平野奥部は、室見川の開析による河岸段丘と、室見川の支流の中小の河川による小扇状地が展開しており、第2次調査調査対象地はこれらの扇状地の一つである長尾川、大谷川の両河川によって形成された扇状地上の広い範囲にわたる。奈良時代の掘立柱建物が検出された峯遺跡群第1次調査地点の北側に隣接し、また13世紀の建物跡が検出された峯遺跡群第2次調査からは舌状丘陵をはさんで北側～北東側方向になる。

調査対象面積は8.7haで、調査は平成9年11月17日から同12月11日まで実施した。調査は平成10年度圃場整備対象地全域にわたって93本のトレンチを設定し、バックホーによるトレンチ掘削の後に、人力による遺構、遺物の精査、写真撮影、遺構・上層の実測を行った。検出された遺構については一部の遺構のみ掘削して遺構の性格を判断した他は基本的に検出するに留め、出土した遺物については一部を除いて採取している。

トレンチごとの調査結果は後述するが、調査区全体の状況を概述すると、まず1トレンチから39トレンチが設定された地区である峯遺跡群が位置する丘陵の北側の段丘下の扇状地部分については、扇状地部分のなかでも比較的高い地区にあたり、遺構・遺物が検出されたトレンチの割合が他の地区に比較して高く、12本のトレンチで遺構を検出している。検出された遺構面の深さは現地表面から-45cmから-90cmを測る。遺構面は大部分が平坦面を呈し、旧地形からある程度の削平を受けていることが容易に推測できた。遺構面の上質は明褐色粘質シルトで、軟質で保水性が高く、他質上の混入が多く見られることから扇状地の形成にしたがって堆積された二次堆積土であると考えられる。この地区で検出された遺構は焼土坑、土坑、ピットの各種で、その他に風倒木とみられる不整形の土坑が多数発見された。風倒木状のこれらの土坑はいずれも各遺構に切られており、比較的古い時期のものであろう。焼土坑はこの地域で一般に見られ、峯遺跡群第2次調査報告でも多数取り上げられているものと同形同種のもので、製炭用のものと考えられているものである。遺構の検出は非常に容易で遺構の形態は明瞭に判別可能である。土坑・ピットについては灰色～明灰褐色粘質土を覆土とするものが多く、遺構面の明褐色土とは容易に区別できるものが多く、検出時の遺構の有無の確認は比較的正確なものであったとみられる。

また、丘陵落差際の、28トレンチから33トレンチにかけて旧河川とみられる黒色粘質土を覆土とする溝状の遺構が検出され、覆土から9世紀の須恵器が出土している。丘陵の上段、あるいは上流部分に同時期の集落が存在していた可能性を示唆するものである。

40トレンチから48トレンチの、扇状地部分のうち大谷川沿いの地区では、扇状地端部の落ち際を検出し、その外側では黒色、灰色の砂礫層となり、河川の氾濫原の様相を示している。これらの河川堆積物の中からは遺構、遺物は検出されていない。また扇状地端部では土師器、青磁などの小片を検出しているが、遺構は認められない。

49トレンチから77トレンチと92・93トレンチは調査対象地区東側の大谷川西岸沿いに位置する。地形的には河岸段丘と河川へ連続する斜面上に位置する。この地区で遺構が検出された地点は54トレンチ、57トレンチの2地点で、いずれも段丘の最も高い部分にあたる。54トレンチでは明褐色粘質土の遺構面から七坑の一剖と見られる遺構を検出し、青磁片、白磁片が出土している。遺構面は大谷川に向かって東に傾斜し、旧地形に沿って遺構が遺存しているとみられた。57トレンチは調査対象地区的

最も南東側に位置し、最も高所に位置する。遺構面は現地表下-55cmで明褐色粘質土上面で遺構を検出した。検出した遺構はピットで遺構密度は比較的濃く、集落の存在が想定できた。遺構面は平坦で、かなりの削平を受けているものと推定された。2地点とも遺構面の土質は明褐色粘質土で、花崗岩風化土を基盤とするものとみられる。この地区のその他のトレンチでは遺構、遺物とも確認できず、各トレンチで粗砂層や巨岩を含む砂礫層に達する。

78トレンチから91トレンチは調査対象地区西側の、長尾川沿いに位置する。長尾川の堆積作用による扇状地上になるが、南側の丘陵端部に近い部分は丘陵の基盤層がみられる。したがってこの地区では、長尾川に近い部分に設定したトレンチで粗砂層や砂礫層に達し、丘陵端部に位置するトレンチで明褐色粘質土が確認されている。いずれのトレンチでも遺構は確認できず、土師器や青磁の小片を確認するにとどまる。

## 2.本調査地点の確定

本年度試掘対象地は概して遺構の密度は薄く、特に大谷川西岸の地域と試掘対象地北側の地域は河川氾濫による砂礫層が厚く堆積し、遺構の想定が困難である。そのなかで、今回遺構、遺物を検出した遺構のうち、開場整備工事時の掘削面の深さを考慮しながら、本調査が必要な地点を決定した結果、本調査は計4地点で必要になるという結論となった。



Fig.2 第2次調査試掘トレンチ位置図 (1/4000)

Tab. I 第2次調査試掘トレンチ一覧表(1)

トレンチ番号	トレンチ方位	トレンチ長(m)	トレンチ幅(m)	堆山面の深さ(cm)	堆山土質	検出遺物
1	N-79°W	27	1.5	70	明褐色粘質土	焼土坑
2	N-73°W	9	1.5	70	明褐色粘質土	上坑、ビット
3	N-6°E	18	1.5	60	明灰褐色土	ビット
4	N-69°W	8	1.5	90	薄灰褐色砂礫土	-
5	N-28°E	15	1.5	130	褐色砂礫土	-
6	N-18°E	4	1.5	160	灰褐色砂礫土	-
7	K-6°E	9	1.5	65	黑灰色砂礫土	-
8	N-85°W	10	1.5	70	灰白色砂質土	溝
9	N-2°W	9	1.5	70	灰白色砂質土	溝
10	N-27°E	11	1.5	120	薄明灰褐色砂質土	-
11	N-62°W	17	1.5	45	暗褐色粘質土	土坑
12	N-39°E	12	1.5	85	褐色粘質土	-
13	N-77°W	20	1.5	70	白褐色砂質土	-
14	N-82°W	15	1.5	60	白褐色粘質土	-
15	N-53°W	27	1.5	60	明黃褐色粘質土	ビット
16	N-57°W	20	1.5	80	薄褐色砂質土	-
17	N-88°E	22	1.5	80	白褐色砂質土	上坑、ビット
18	N-88°E	21	1.5	65	薄褐色粘質土	ビット
19	N-26°W	4	1.5	70	灰色壤土	-
20	N-27°W	8	1.5	50	薄褐色砂質土	-
21	N-26°W	5	1.5	95	灰色壤土	-
22	N-65°E	24	1.5	50	褐色砂礫土	焼土坑、ビット
23	N-1°W	27	1.5	70	白褐色粘質土	焼土坑、ビット
24	N-22°W	30	1.5	50	褐色粘質土	ビット
25	N-20°W	30	1.5	65	薄褐色粘質土	-
26	N-66°W	20	1.5	60	薄灰褐色粘質土	-
27	N-40°W	9	1.5	90	灰色砂礫土	-
28	N-8°W	26	1.5	80	薄褐色粘質土	ビット
29	N-85°E	12	1.5	110	薄褐色粘質土	-
30	N-18°W	28	1.5	110	灰色砂礫土	-
31	N-13°W	21	1.5	90	薄灰褐色粘質土	土坑
32	N-71°W	11	1.5	140	灰色壤土	-
33	N-89°E	6	1.5	150	暗灰色砂礫土	-
34	N-81°E	18	1.5	80	白褐色土	-
35	N-21°W	10	1.5	120	黑褐色壤土	-
36	N-28°W	30	1.5	70	明褐色粘質土	焼土坑
37	N-17°W	40	1.5	50	明褐色粘質土	土坑、ビット
38	N-17°W	9	1.5	70	褐色粘質土	ビット
39	N-90°E	12	1.5	60	薄褐色粘質土	溝、ビット
40	N-29°W	12	1	85	灰色砂質土	-
41	N-33°W	14	1	60	薄褐色粘質土	-
42	N-34°W	3	1	60	明褐色壤土	-
43	N-13°W	11	1	60	褐色砂礫土	-
44	N-90°E	5	1	65	薄灰褐色粘質土	-
45	N-90°E	4	1	70	灰色砂礫土	-
46	N-89°W	5	1	50	灰色砂壤土	-
47	N-64°E	5	1	70	灰色砂礫土	-
48	N-69°E	4	1	100	灰色砂壤土	-
49	N-4°W	5	1	100	明褐色粘質土	-
50	N-86°E	5	1	100	明褐色粘質土	-
51	N-73°E	5	1	40	灰色砂礫土	-
52	N-73°E	5	1	80	灰色砂礫土	-

Tab. 2 第2次調査試掘トレンチ一覧表 (2)

トレンチ番号	トレンチ方位	トレンチ長(m)	トレンチ幅(m)	地山面の厚さ(cm)	地山土質	検出遺物
53	N-87°-W	5	1	110	灰色砂礫土	-
54	N-5°-W	10	1	45	明赤褐色粘質土	土坑
55	N-3°-W	8	1	65	明褐色粘質土	溝
56	N-1°-W	4	1	120	灰色砂礫土	-
57	N-32°-E	7	1	55	明褐色粘質土	ピット
58	N-80°-W	4	1	80	薄灰褐色砂質土	-
59	N-77°-W	6	1	80	灰色砂礫土	-
60	N-20°-E	6	1	35	明褐色粘質土	-
61	N-0°-E	6	1	110	明褐色粘質土	焼土坑
62	N-87°-W	5	1	65	灰色砂礫土	-
63	N-82°-E	4	1	75	暗灰色砂礫土	-
64	N-85°-W	4	1	85	灰色砂礫土	-
65	N-0°-E	5	1	80	薄褐色砂礫土	-
66	N-85°-E	4	1	25	灰色砂礫土	-
67	N-86°-E	8	1	80	灰色砂質土	-
68	N-90°-E	4	1	30	黃褐色砂礫土	-
69	N-0°-E	6	1	100	薄灰褐色砂礫土	-
70	N-0°-E	5	1	95	灰色砂礫土	-
71	N-0°-E	7	1	80	暗褐色土	-
72	N-86°-W	5	1	60	褐色砂礫土	-
73	N-48°-W	6	1	80	薄褐色砂礫土	-
74	N-30°-E	5	1	70	薄褐色砂礫土	-
75	N-46°-E	5	1	90	灰褐色砂質土	-
76	N-0°-E	5	1	70	薄灰色砂礫土	-
77	N-19°-E	6	1	50	褐色砂礫土	-
78	N-89°-W	8	1	80	薄褐色粘質土	-
79	N-90°-E	7	1	90	明褐色砂質土	-
80	N-90°-E	5	1	70	灰色砂礫土	-
81	N-89°-W	6	1	50	明褐色粘質土	-
82	N-90°-E	5	1	80	灰色砂礫土	-
83	N-13°-E	8	1	60	明褐色粘質土	-
84	N-50°-W	5	1	80	褐色砂礫土	-
85	N-63°-W	4	1	80	褐色砂礫土	-
86	N-69°-W	14	1	75	灰白色粘質土	-
87	N-86°-W	5	1	85	明褐色粘質土	-
88	N-6°-W	6	1	55	明褐色粘質土	-
89	N-0°-E	5	1	60	薄灰褐色粘質土	-
90	N-0°-E	4	1	110	明灰色砂質土	-
91	N-89°-E	3	1	40	褐色砂礫土	-
92	N-0°-E	3	1	70	褐色砂礫土	-
93	N-52°-W	5	1	40	薄褐色岩盤	-

## 第4章 内野遺跡群第3次調査の記録

内野西地区圃場整備事業に伴う98年度埋蔵文化財調査は4地点にまたがることから、各区をA区からD区まで呼称することとし、報告も各々ごとに行う。

### 第1節 A区の調査

#### 1. 調査区概要

A区調査地点は調査対象地全体のなかで最も南に位置し、かつ最も高所に位置する。前章で述べた試掘調査（第2次調査）で57トレンチとして設定した地点である。山田川と大谷川にはさまれた舌状の丘陵の北側先端部に位置し、南側は道路をはさんで丘陵が南に延びている。調査区の東側は大谷川に落ちる斜面になり、西側は山田川に面している。北側は緩く傾斜する斜面が丘陵最先端まで続き、北側との比高差は1m未満である。調査区の旧況は水田で、現在の水田区画1枚全体が調査区として設定された。調査区の形は東西に細長い半格円形とみることができる。以前の田地開削のためにある程度の削平を受けていることが推測できる。

圃場整備計画では、田面のほぼ全部が切り土で削られる予定であったため、全面にわたって調査を行った。調査面積は700.8m<sup>2</sup>である。層序は現耕作上、床土の下、現地表面から-40cm～-55cmで明褐色～明赤褐色粘質土になり、この面で遺構が検出されている。遺構面は北側から北西側で急に落ち込み、その上層に遺物包含層を形成する。また調査区東半分は丘陵基盤の花崗岩が露出し、この部分が大きく削平を受けていることを表わしている。この部分では遺構は検出されていない。検出された遺構は溝、土坑、ピットで、ピットの配置から、掘立柱建物が1棟復元可能である。出土した遺物は中世の土師器、青磁、白磁を中心とし、縄文時代、古墳時代の遺物をごく少量含む。

なお、調査後に工事設計が一部変更され、調査区の南側部分は埋め戻し保存されている。

#### 2. 検出遺構・遺物

##### SK-01 (Fig.5)

調査区南西側で検出された土坑である。土坑本体は長径118cm、短径100cmの楕円形を呈し、主軸方向は北東-南西方向に向く。土坑東側にごく緩く落ち込む不整形の部分が付随する。土坑東側で転石が重なって出土したが、人為的に積みあげられた状況ではない。遺構の遺存状態は悪く、検出時の深さは10cmにとど

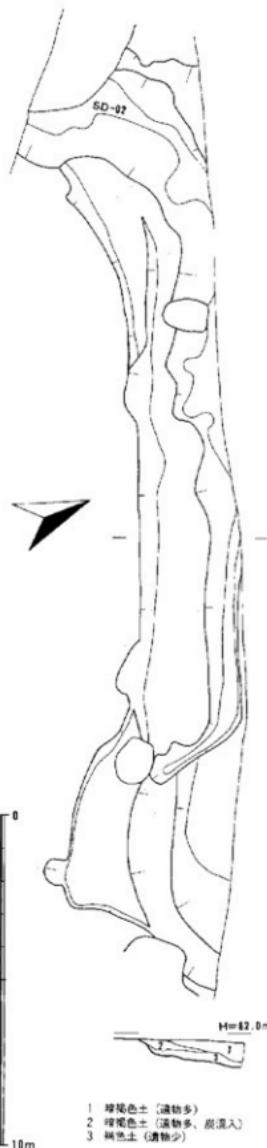


Fig.3 A区SD-02、調査区北西部分実測図 (1/150)

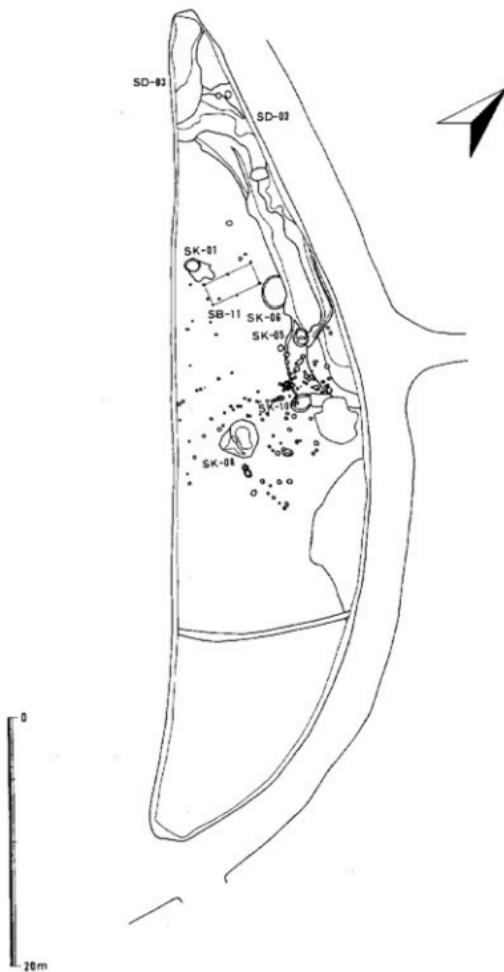


Fig.4 A区道構配図 (1/400)

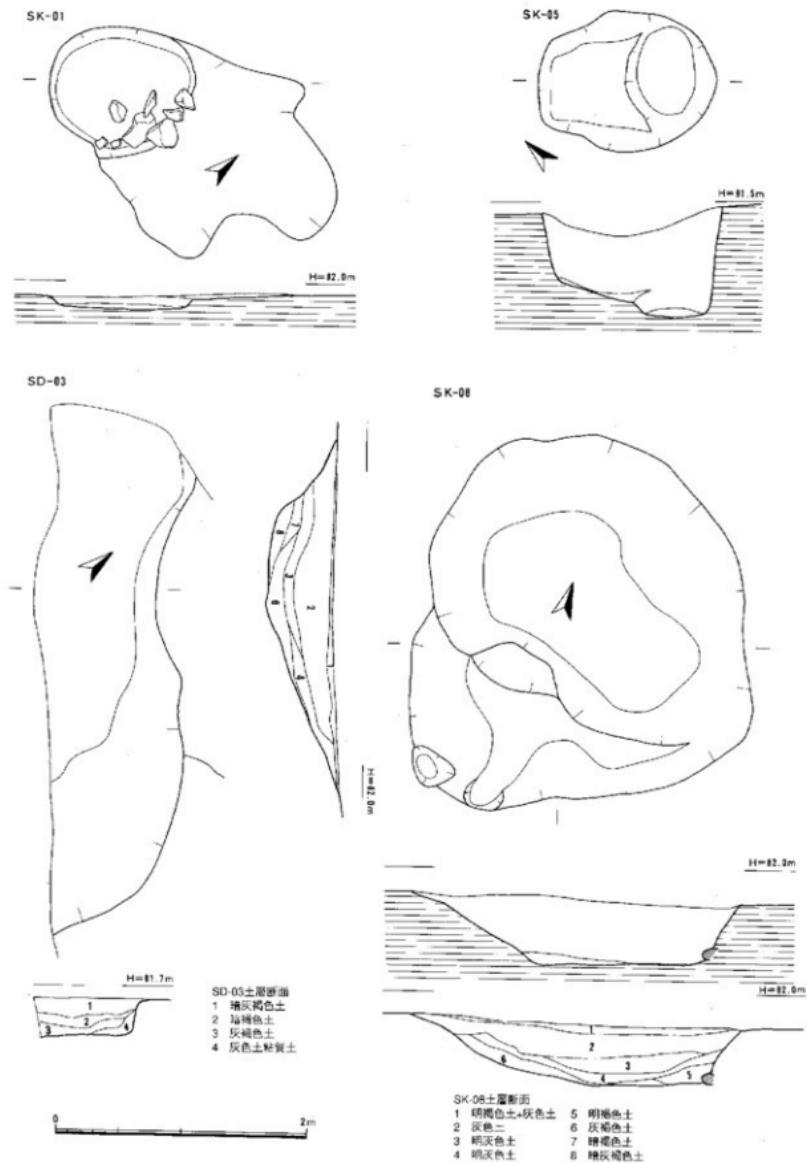
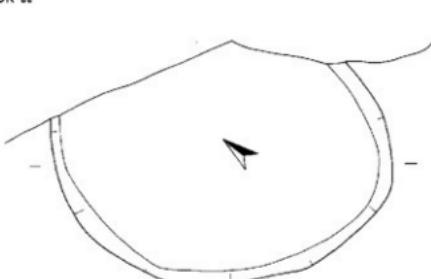
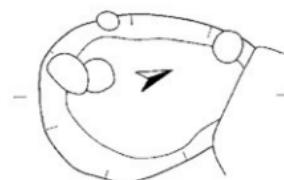
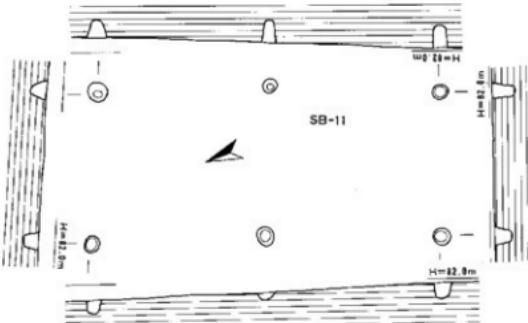


Fig.5 A区遺構実測図 1 (1/40)

SK-88

 $H=82.0m$ 

SK-10

 $H=81.8m$ 

2m

Fig.6 A区遺構実測図2 (1/40)

まる。覆土は灰褐色粘質土で均質な堆積状況である。出土遺物はない。

#### SD-02 (Fig.3)

調査区西側で検出された、南北方向に延びる溝状遺構。調査時には北側に東西方向に延びる段落ちも含めてSX-02としていたが、北側の段落ちと区別して、西側の溝部分のみを限定してSD-02とすることが適當と思われる。溝は幅4m前後、調査区内での長さ約6m、深さ70cm前後を測り、南西から北西方向に延びる状況が見られる。南側をSD-03に切られるが、北側の段落ちとの切り合い関係は不明である。断面形は緩いV字形で、覆土は灰褐色土を主とし、水が流れた形跡は見られない。また遺構内に転石が見られる。

#### 出土遺物 (Fig.7)

1は白磁碗底部。高台径7.4cm、高台高1.2cm。釉は暗白色で、内底見込み部分に露胎部分が輪状に残り、内底見込みに砂が多く付着する。高台外面と外底見込みは露胎。高台部分は粘土貼付け後回転ヘラ削り。2は青磁碗底部。釉は暗薄青白色を呈し、内面及び外面全体に施釉し、外底見込みは露胎。高台は削り出しで、径7.4cm。内面見込みに砂粒が付着する。外面底部付近に縦方向の短い平行線を刻

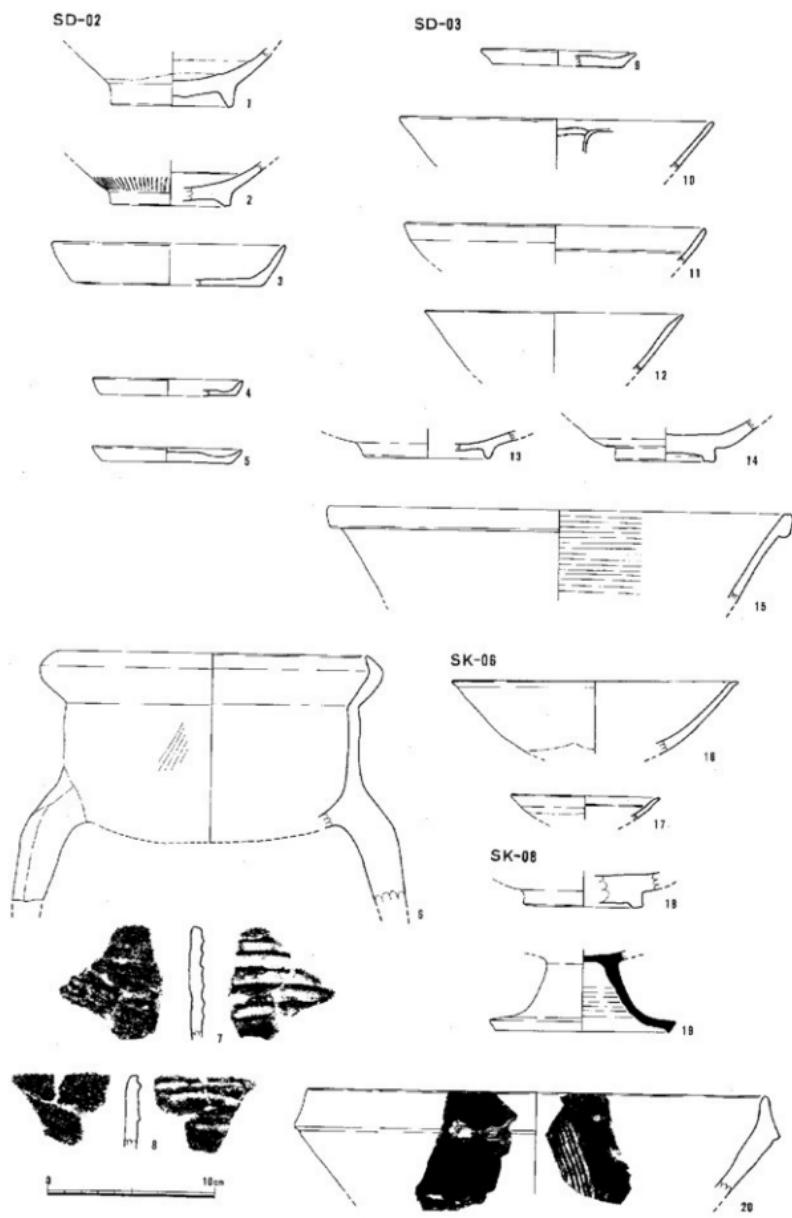


Fig.7 A区出土遺物実測図 1 (1/3)



Fig.8 A区出土遺物  
実測図2 (1/3)

む。3は土師器杯で、口径13.8cm、器高2.5cm、底径11.4cm。胎土は明赤褐色で風化が著しい。

4、5は土師器皿。4は口径8.8cm、器高0.9cm、底径7.8cm。底部は糸切り。風化が進み、口縁端部が原形を留めない可能性がある。5は口径8.8cm、器高1.0cm、底径8.0cm。底部は糸切り。風化が著しい。6は瓦器鼎で、脚部は1脚のみ遺存する。口径18.4cm、脚部に煤が付着する。

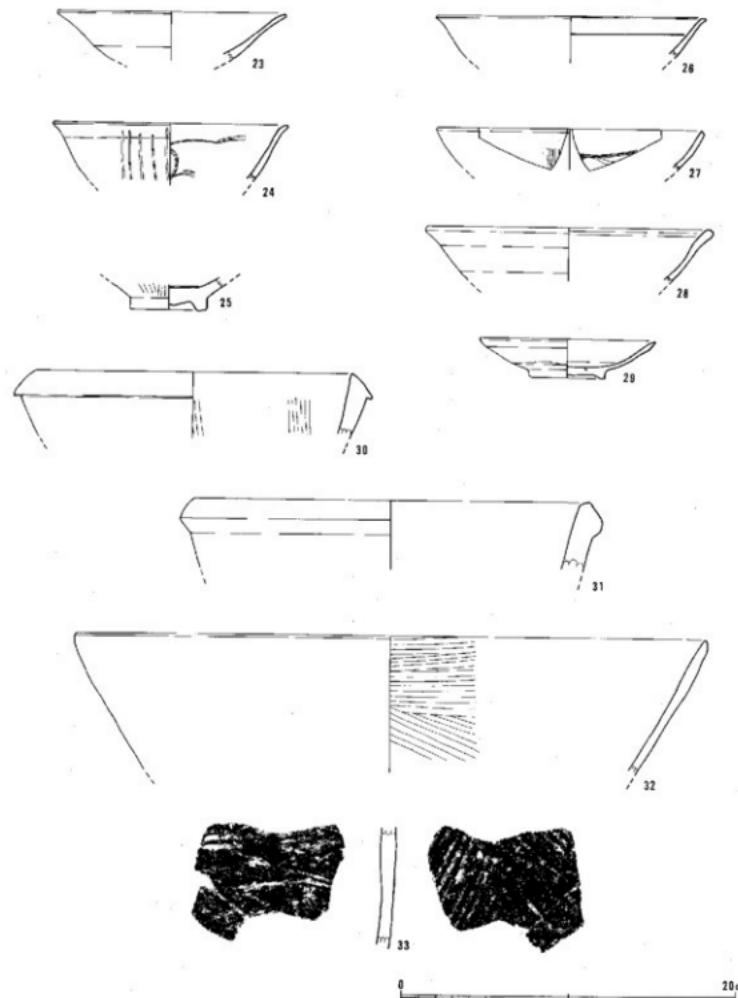


Fig.9 A区出土遺物実測図3 (1/3)

7、8は繩文上器破片で、流れ込みと見られる。7は粗製深鉢口縁部と見られ、外面に横方向の隆起文、内面に条痕文を施文する。8は粗製深鉢口縁部で、外側に広がる。外面に隆起文を施文し、内面は無文。

#### SD-03 (Fig.5)

調査区西端で検出された遺構。調査区内では南側に落ち込む部分のみ検出されたが、南側が丘陵に面することから、単なる落ち込みではなく南側で溝状にまとまると考えられ、東西方向に延びる溝としておく。調査区内での長さ4.25m、幅1.1mを測るが、幅、長さとも調査区外に広がるものと見られる。深さは30cm前後で、床面は平坦面を呈し、壁の傾斜は急である。土層断面から見た堆積状況は自然堆積を示している。また遺構内に転石が多数見られる。

#### 出土遺物 (Fig.7)

青磁、白磁、上器皿こね鉢等が出土する。9は上器皿で、口径9.4cm、底径8.0cm、器高0.9cm。底部は糸切り。10~12は青磁碗で、10は口径18.8cm。口縁部に輪花がみられる。釉は薄青緑色を呈し、内面に2本の区画線が見られる。外面は無文。11は口径18.0cm、釉は薄青色を呈し、外面の釉表面に細かい気泡がみられる。内面に横方向の沈線を1条施文する。13は白磁碗底部。高台径7.4cm、高台高6mm。外面、見込みは施釉され、外底見込みのみ露胎。14は青磁碗底部。内面から外面、外底見込みの一部まで施釉され、釉は明緑色~暗青緑色を呈する。15はこね鉢。口径27.6cm。口縁は折り返しで、外面は煤が濃く付着する。

遺物の内容から、遺構の埋没時期は12世紀後半から13世紀にかけてと推定する。

#### SK-05 (Fig.5)

調査区中央北側で検出された土坑。全長1.44m、幅1.15m、深さは84cmを測る。平面形は長方形で中央部が張り出し、南北側が若干丸みを帯びる。主軸方向は北東~南西方向に向く。壁は各面ともほぼ垂直に立ち上がり、断面形は箱形を呈する。床面は南東側が一段低く掘込まれ、掘込まれた部分は楕円形をなす。覆土は灰褐色粘質土で明褐色土ブロックを含んで極めて軟らかく、均質に堆積しており、自然堆積の様相は何えない。墓壙の可能性が高いと考えられる。

出土遺物は、青磁小破片が1点と土器器小片が2点出土する。青磁片は暗緑色で碗の破片とみられるが、詳細は不明。土器器片は風化、磨滅が進む。

#### SK-06 (Fig.6)

調査区中央北側で検出された土坑。全長2.72mで、北側を段落ちに切られる。深さは15cm前後で、遺存状態は良くない。平面形は楕円形であったとみられ、壁は床面から広がって立ち上がり、床面はほぼ水平になる。覆土は砂混じり灰褐色粘質土で、段落ち部分の包含層と明瞭に区別される。遺構の性格は不明。

#### 出土遺物 (Fig.7)

16は白磁碗で底部を欠く。口径17.2cm、口縁部は短く外反する。釉は薄灰白色で、内面は全面施釉、外面は上部を施釉し、下部は露胎。内外とも無文。17は白磁皿で、口径9.0cm。体部上位付近で屈曲する。釉は薄灰白色で、内面は施釉、外面は屈曲部以上は施釉、下部は露胎。

#### SK-08 (Fig.5)

調査区中央部で検出された土坑。長さ1.66m、幅1.88mで、平面形は円形に近い不整形でまとまった形になる。土層の堆積状況は各層とも流れ込みによる自然堆積の状況を示す。遺構壁面は床面から開き氣味に立ち上がり、断面形は逆台形になる。土坑北側の最も深い部分で深さ50cm前後を測り、床面の平面形は楕円形を呈する。床面はほぼ平坦で、埋没時に混入した転石が若干みられる。遺構南側部分は流れ込みによって削られた痕跡を示すものとも考えられる。遺構の性格は不明。

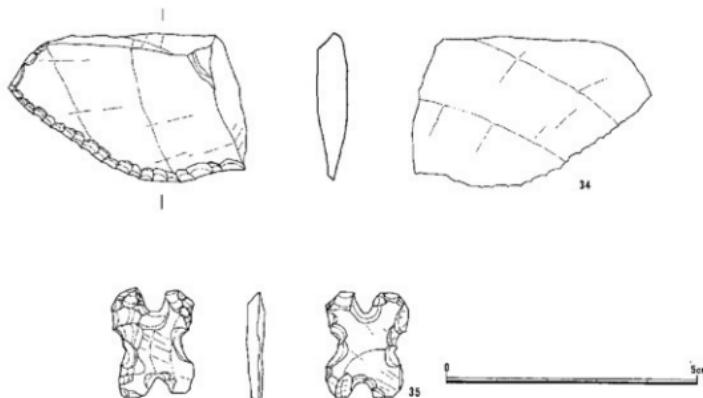


Fig.10 A区出土遺物実測図4 (1 / 1)

#### 出土遺物 (Fig.7)

18は青磁碗底部。高台径7.2cmで、高台は浅く削り出す。釉は薄青緑色を呈しガラス質で透明。内面及び高台外面まで厚く施釉する。外底見込みは露胎。19は須恵器高杯脚部である。脚部径10.2cm、脚部高4.0cm。外面と内面は回転ヨコナデで、脚端部はわずかに下垂する。20は土師質の捕鉢。鉢形で体部上部で屈曲し、口縁部はやや直に立ち上がる。内面に縱方向の描目が付くが、破片のため描日の単位は不明。

#### SK-10 (Fig.6)

調査区中央部で検出された上坑。北側を段落ちによって削られる。全長1.8m以上、幅1.34m、深さ20cm前後を測る。平面形は楕円形で、西側が若干広がるものとみられる。壁は南側で開き気味に立ち上がり、断面形は浅い整状をなす。床面はほぼ水平になる。覆土は灰褐色粘質土で、段落ち部分の包含層と明瞭に区別される。遺構の性格は不明。

#### 出土遺物 (Fig.8)

21は白磁皿。口径11.6cm。内外面に白色の釉がかかり、外面下部は露胎。口縁部は丸く仕上げ、大部は丸みをもって立ち上がる。22は褐釉陶器底部で、碗破片と見られる。底径4.6cm。内面は施釉され、外面は露胎となり、外面は薄赤褐色、内面は暗緑褐色を呈する。

#### SB-11 (Fig.6)

調査区西側で確認された2間×1間の掘立柱建物。主軸方向はN-18°Eで、梁行1.8~1.94m、桁行4.1~4.16m、柱間2.08mの等間を測る。柱穴はいずれも直径20cm前後の円形で、深さは10~28cmを測り、西中間側柱がやや浅いのを除いて、特に深い柱穴はない。柱穴の覆土は明灰色粗砂質上で、他の柱穴覆土の灰褐色粘質土との違いが明瞭である。

各柱穴からの出土遺物はない。

### 3. 包含層その他からの遺物

上記の検出遺構の他に、調査区北側で丘陵の段落ちを検出している (Fig.3)。段落ち部分は調査区北

側のうち西半部分に広がり、上段の遺構面から50cmほど急に落ち込んで、北側に緩く傾斜していく。上層断面で見られる埋没状況は、流れ込みによる自然堆積の状況を示す。遺物の出土量は下層で少なく上層で多くなる傾向が見られる。この段落ち部分の堆積土や包含層などから出土した遺物を以下に報告する。

#### 出土遺物 (Fig.9)

23は青磁碗。口径13.6cm、口縁部が軽く外反し、端部は丸くする。釉は淡緑色で内面は全面施釉し、口縁部付近の釉がやや厚い。外面も全面施釉する。24は青磁碗。口径14.0cm。口縁部はく字形に外反する。外面に縱方向の平行沈線を施し、内面に櫛描文を施文する。遺存する範囲で内、外面とも全体にオリーブ緑色の釉がかかる。25は青磁碗底部。高台径4.6cm、高台高0.7cm。内面は緑青色の釉が施釉され、外面は露胎。外面に縱方向の簡整痕が残る。26は青磁碗。口径16.2cmで、口縁部は軽く外反する。内外面とも灰青色の釉が施釉され、内面に横方向の沈線が1条めぐる。27は青磁碗。口径16.0cmで、内面は暗緑色の釉が施釉され、櫛描文を施文する。外面も全面施釉され、縱方向の櫛描文を施文する。28は白磁碗。口径16.6cmで、口縁部が内側に若干比厚する。内外面とも遺存する部分は乳白色の釉が全面施釉される。29は白磁皿。口径10.6cm、器高2.3cm、高台径4.6cm。高台高0.5cm。口縁部は若干比厚させながら開く。内面は見込みも含め全面灰白色釉を施釉し、外面は上半が施釉、高台付近が露胎である。30は櫛釉の擂鉢で、口径18.8cm。内面に6条単位の擂目を入れる。口縁部は折り返してやや垂下する。内外面とも全面施釉。31は石鍋口縁部。滑石製で、口縁外径25.2cm、口縁内径22.6cm。口縁外面をやや比厚させる。内面は横方向の擦痕が多く残り、外面は煤により黒変する。32は土師器鉢とみられる。口径37.6cmで、内面は横方向ハケ目、外面は厚く煤が付着する。

33は繩文粗製深鉢破片。外面は斜格子文、内面は粗い横方向条痕文を施文する。

#### 4.石器 (Fig.10)

34はスクレイバー。安山岩製で長さ47mm、幅30mm、厚さ5mm。表裏面とも剥離面を残し、刃部加工は片面にのみ施し、刃部以外の側面は大きく打ち欠かれる。SD-03出土。

35は安山岩製で、長さ22mm、幅15mm、厚さ3.5mm。四周に抉りを入れ、石鏃と形態が類似する。遺物の性格、用途など不明。

## 第2節 B区の調査

### 1. 調査区概要

B区は調査区全体の南側、A区の北西側に位置し、前章で述べた試掘調査（第2次調査）で54トレンチとして設定した地点である。山田川西岸の、東に面した丘陵斜面上に位置する。西側が丘陵側で急に上がる他は、北側、東側、南側とも緩い傾斜で連続し、現況では水田造成面の緩い段差をもって東側に傾斜し、周囲の水田面との比高差は1m未満である。

調査区の旧況は水田で、現在の水田区画で連続する2枚全体が調査区として設定された。調査区の形は当初道路に沿った南北に細長い区画として設定していたが、本調査段階で推定よりも東側まで段丘面が広がり、遺構の分布もそれに伴うことが判明したためにはま水田2枚分を完掘している。調査面積は915.5m<sup>2</sup>にのぼる。調査区内は以前の田地間削のためにある程度の削平を受けているとみられる。

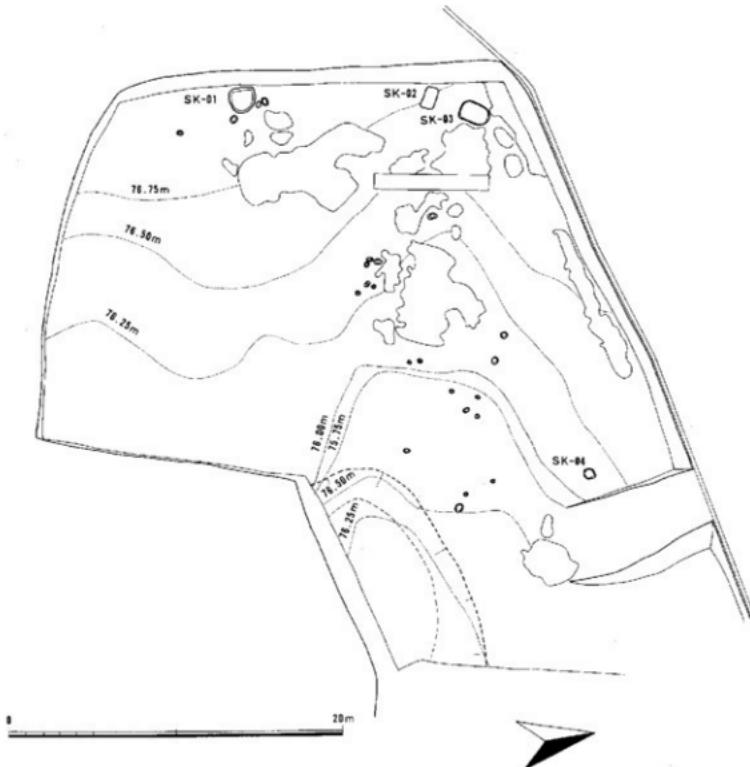


Fig.11 B区遺構配置図 (1/300)

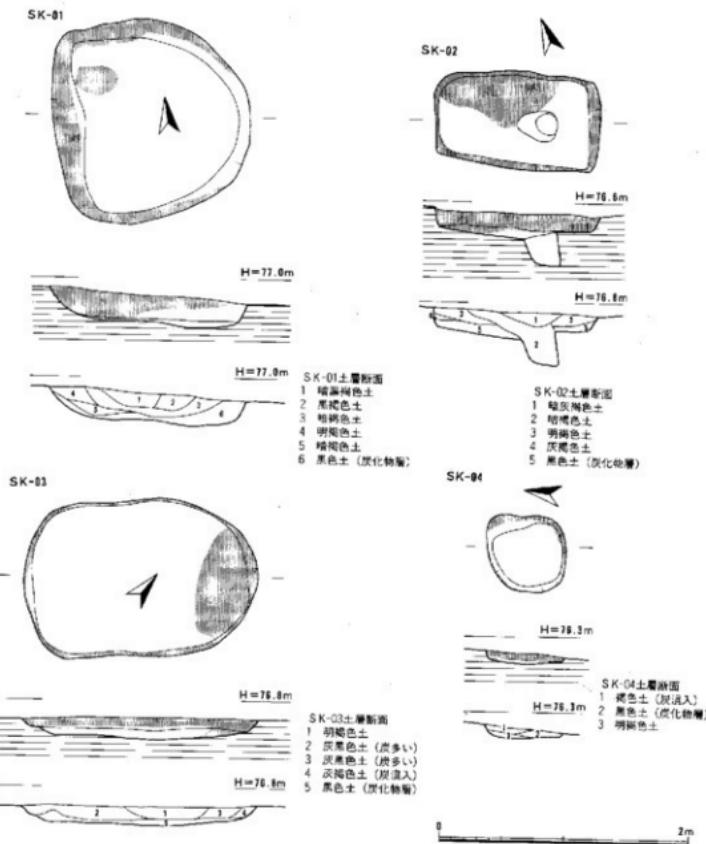


Fig.12 BI区遺構実測図（1/40）

層序は現耕作上、床土の下、現地表面から-40cm~1mで明褐色~明赤褐色粘質土になり、この面で遺構が検出されている。遺構面は南側から北側に緩く傾斜し、同時に西側から東側への傾斜も認められ、谷頭の様相を示す。検出された遺構は焼土坑、ピットで、建物の配置は認められない。また調査区全体に不整形の凹みが多数見られるが、遺構としてまとまるものではない。出土遺物は表土、包含層などから土師器、青磁など中世とみられる遺物が出土したほか、弥生土器等も確認できるが、小片のものが多い。

## 2.検出遺構・遺物

### SK-01 (Fig.12)

調査区西側部分で検出した焼土坑。全長1.60m、幅1.64cm、深さ25cm前後を測る。平面形は隅丸台形を基本とした形と見られ、短辺が極端に丸くなつて半円形に近い形になつてゐる。遺構壁は西側壁で床面から比較的緩く立ち上がり、東側は床面から急な傾斜で立ち上がる。壁の被熱は西側で強く、特に北西隅部分では床面の一部まで被熱部分が及んでゐる。東壁は遺構内面は被熱が弱く、遺構上端が赤変するだけである。床面はほぼ平面で、東側に緩く傾斜するが、傾斜角は遺構面の傾斜に平行し、遺構の深さは一定である。覆土の堆積状況は流れ込みによる自然堆積を示してゐる。最下層に製炭操業の残滓である炭化物層が堆積し、上層は炭混じりの明褐色土、暗褐色土が堆積する。

遺構内からの出土遺物はない。

### SK-02 (Fig.12)

調査区北西側で検出した焼土坑。全長1.32cm、幅80cm、深さ20cm前後を測る。平面形は長方形で、西壁が東壁よりもわずかに短い。壁は四周とも床面から直に立ち上がる。床面は平坦で、中央部にピットがあるが、焼上坑操業後に切り込んだもので炭化物をほとんど含まないため、焼土坑に直接関係するものではないとみられる。遺構内は壁面全周で強く被熱するが南壁の被熱が比較的弱い。また被熱部分は床面北側まで及ぶ。覆土の堆積状況は流れ込みによる自然堆積を示してゐるが、中央部のピット部分は遺構上面から切り込まれた様相を示す。最下層に炭化物層が比較的厚く堆積し、上層は明褐色土が堆積する。

遺構内からの出土遺物はない。

### SK-03 (Fig.12)

調査区北西隅で検出した焼土坑。全長1.86m、幅1.26cm、深さ15cm前後で遺存状況はが良くないが、これは旧地形でこの部分が最も高いことによるものである。平面形は指円形で、中央部がわずかにくびれた形になる。壁は床面から緩く立ち上がり、西壁は一部で段がつく。床面はほぼ平坦である。遺構内の被熱状況は、壁面はほぼ全周が熱を受けているが、特に北東側の壁面の被熱が強い。床面も北東側で一部焼けるが、焼け方は弱い。覆土の堆積状況は自然堆積とみられる。最下層に炭化物層が薄く堆積し、上層で明褐色土、灰褐色土などの炭混じり土が堆積する。

出土遺物 (Fig.13)

39は青磁皿。口径11.4cm。口縁部が若干比厚し、わずかに外反する。釉は薄青緑色で内外面とも施釉しているが、風化進み、表面が白っぽくなり気泡が目立つ。40は白磁碗底部。高台径6.2cm、高台高0.5cmで内面は乳白色釉を施釉し、外面は露胎。

### SK-04 (Fig.12)

調査区北側で検出された焼上坑。全長64cm、幅64cm、深さ5~10cmで、小型の焼上坑である。平面形は円形に近い不整形で、東側に一部張り出した部分がある。壁は床面から開き気味に立ち上がる。床面は平坦ではほぼ水平。壁の上位部分で被熱による赤変が見られ、特に北側部分の壁面で赤変が強い。遺構内には南側で炭化物層が遺存する。

遺構内からの出土遺物はない。

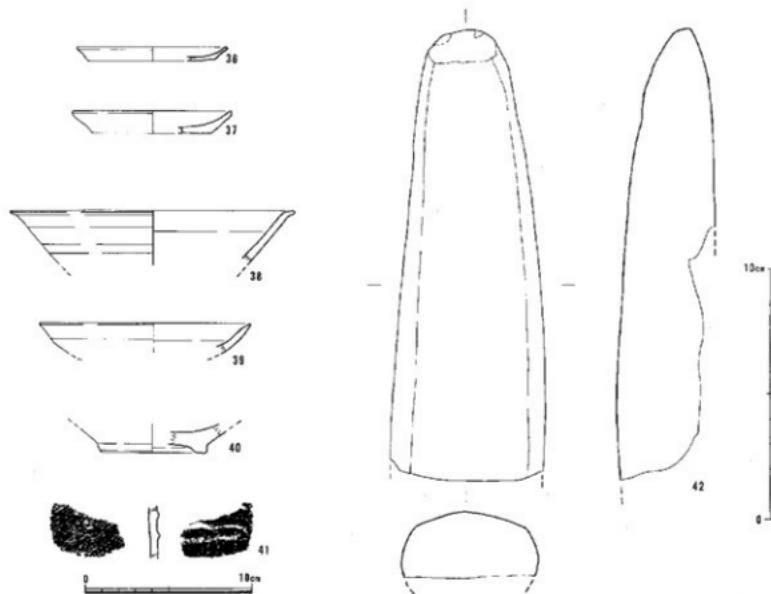


Fig.13 B区遺物実測図 (1/3, 1/2)

### 3. 包含層その他の遺物 (Fig.13)

36、37は土師器皿。36は口径8.8cm、底径7.6cm、高さ0.8cm。底部は糸切りで、板状圧痕が残る。37は口径9.2cm、底径7.0cm、器高1.4cm。底部は糸切りで、板状圧痕が残る。38は青磁碗で、口径17.0cm。口縁部が外反し、口縁上面が平坦になる。道存部分は内、外面とも施釉され、内面には砂粒がわずかに付着し、外面は釉表面に気泡が目立つ。

41は縄文深鉢破片とみられる。外面には隆起文が貼付けられ、内面は条痕文を施文する。42は磨製石斧で、刃部を欠く。粘板岩製で細長い形をし、刃部がやや広がる。

## 第3節 C区の調査

### 1. 調査区概要

C区調査地点は調査対象地全体の中央部やや北に位置する。前章で述べた試掘調査（第2次調査）で39トレンチとして設定した地点である。大谷川と長尾川にはさまれた扇状地上の、北から南に緩く傾斜する斜面上に位置し、東側は緩く落ちる斜面が大谷川まで続いている。周囲との比高差は50cm未満である。調査区の旧況は水田で、C区調査区範囲は東西方向に計画された道路のうち、遺構が確認された部分を設定した。したがって調査区の平面形は細長い長方形を呈する。また調査区内は以前の田地開削のためにある程度の削平を受けていたことが推測できる。調査面積は296.8m<sup>2</sup>である。

層序は現耕作土、床土の下、現地表面から西側で-40cm、東側で-1mで明褐色～明黄褐色粘質土になり、この面で遺構が検出されている。遺構面は西から東に緩く傾斜しており、暗褐色土、黒色土が全面にしみ状に混入する。調査区の南北側の一段高い部分は現水田区画による造成の痕跡である。検出された遺構は土坑、ピットが主で、ピットの配置からは建物の復元は困難である。調査区全体に不整形の凹みが多数見られるが、形態、覆土の堆積状況からみて、風倒木の可能性が強い。確認された遺構はこれらの風倒木痕を切る形で検出される。調査区北東隅で、縄文時代の深鉢が2個体出土し、埋甕の可能性が高い。出土した遺物は少なく、前述の縄文土器の他、石器などが出土するにとどまる。

### 2. 検出遺構、遺物

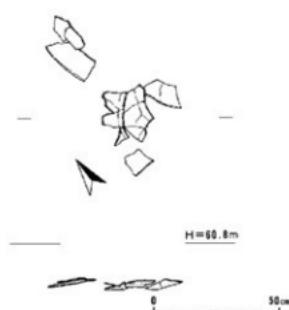
#### SX-01 (Fig.14)

調査区北東隅で検出された、縄文土器を中心とする遺構。遺構掘り方は不明瞭で、遺構面で全破片がほぼ同レベルで検出される。出土した破片は2個体分確認でき、いずれの破片も半裁された部分が外面を上にして押しつぶされた様な形で出土し、各々の口縁部が検出範囲の中央付近で接している。この部分を境に各個体の破片が位置し、検出状況からは主軸方向を東西方向にとる合口で埋置されていた可能性が考えられる。土器検出面の下層も調査終了後に掘り下げたが、別破片は出土しなかった。

#### 出土遺物 (Fig.16)

43は精製の浅鉢。口径42.8cm。体部は丸みをもち、頸部で屈曲して直に立ち上がり、口縁部は外方に屈曲して広く聞く。口縁端部には細く面を作る。内外面とも横方向のミガキ。内外面とも黒褐色を呈し、焼成は良好。

44は粗製の深鉢。口径56.4cm。胴部は直立し、口縁部は外方に屈曲して直線的に聞く。口縁端部は刺突文を連続して施文している。施文工具は凹凸のある貝殻状工具であろう。外面は口縁部が横方向の粗い条痕文、胴部が丁寧なナデ。内面は口縁部が横方向の条痕文、胴部がナデ。



#### 3. その他の遺物 (Fig.17)

45は調査区北側壁面から出土した打製石器。黒曜石製で、長さ22mm、幅17mm、厚さ5mm。二等辺三角形を呈し、比較的幅広な形態を成す。基部の抉りは浅い。表裏両面に剥離整形を行っており、断面はレンズ状を呈する。

Fig.14 C区SX-01実測図 (1/20)

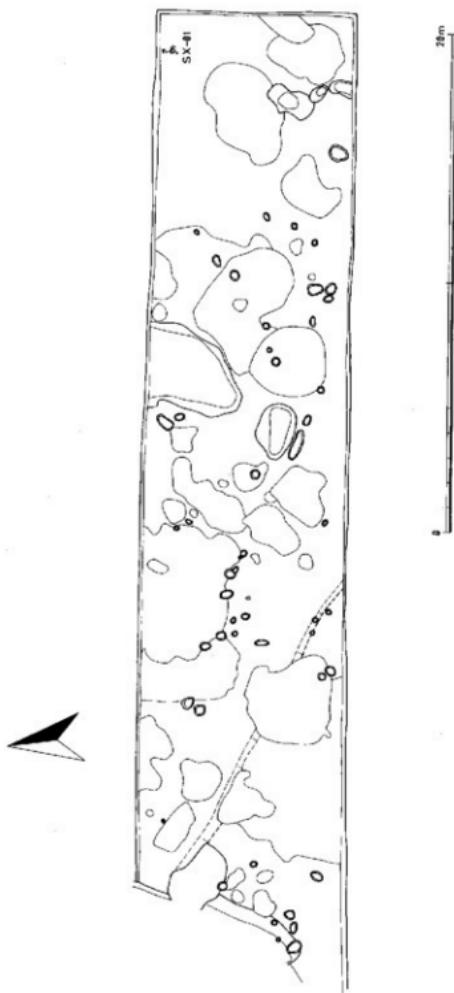


Fig.15 C区造構配置図 (1/200)

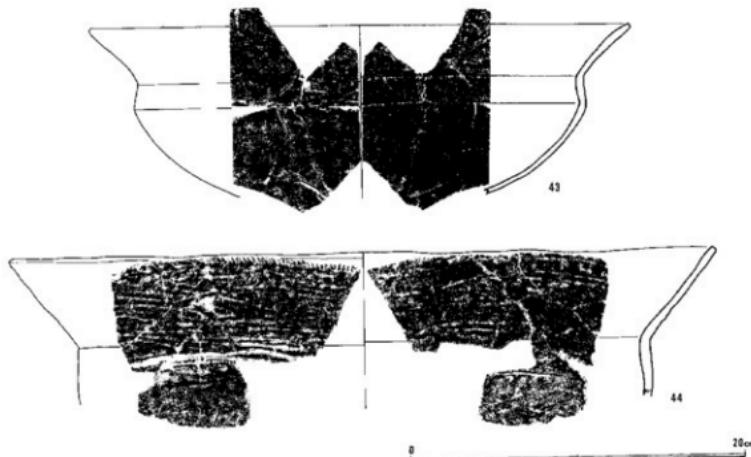


Fig.16 C区出土遺物実測図1 (1/3)

#### 第4節 D区の調査

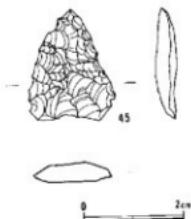


Fig.17 C区出土遺物

実測図2 (1/1)

##### 1. 調査区概要

D区調査地点は調査対象地全体の中央部分西側に位置する。前章で述べた試掘調査(第2次調査)で18トレンチとして掘削し、遺構を確認した地点の近接地で、遺構が広がっている可能性が高いため調査区として設定した。調査地点は扇状地上の地区のうち長尾川西岸に面した地点で、扇状地上の平坦地部分から西側斜面部分にかかる。現況は水田で、周囲との高差は50cm未満である。D区調査区範囲は東西方向に計画された道路部分のうち、遺構の存在が推定される部分を設定した。したがって調査区の平面形は細長い長方形を呈する。調査面積は322.1m<sup>2</sup>である。

層序は現耕作土、床上の下、現地表面から東側で-40cmで明灰褐色粘質土となり、この面で焼土坑が検出され、さらに30cm前後下層でピットを検出する。西側では-50cm~1mで明褐色粘質土になる。遺構面には暗褐色土、黒色土が全面にしみ状に混入し、遺構面の上質はC区のそれに近似する。検出された遺構は焼土坑、ピットで、ピットの配置からは建物の復元は困難である。C区と同様、調査区全体に不整形の凹みが多数見られるが、これも形態、覆土の堆積状況から風倒木とみられる。確認された遺構はこれらの風倒木痕を切る形で検出される。出土した遺物は少なく、包含層から土師器小片のほか、石礫が出上するにとどまる。柱穴、土坑を含め、遺構内からの出土遺物は見られない。

##### 2. 出土遺構

###### SK-01 (Fig.19)

調査区東側で検出した焼土坑。全長1.26m、幅85cm、深さ25cm前後を測る。平面形は長方形で、南側がわずかに広い。遺構壁面は床面から開いて立ち上がる。床面は細かい凹凸が多数見られる。遺構



Fig.18 D区造構配置図 (1/200)

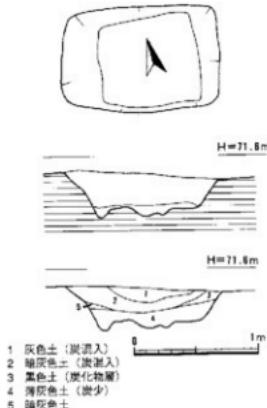


Fig.19 D区SK-01実測図  
(1/40)



Fig.20 D区出土遺物実測図  
(1/1)

### 3. その他の遺物 (Fig.20)

46は遺構面で出土した打製石鎌である。全長43mm、厚さ5mmを

測る。長脚鎌で、片脚を欠損する。両面に細かい剥離整形を行っており、脚部も両側からの細かい剥離を施している。断面形はレンズ状を呈し、肉厚である。

## 第5章 内野遺跡群第2次・第3次調査総括

### 各区の特徴

第3次調査の4地区については出土遺構、遺物の報告を前章で行っている。ここで各区の遺構、遺物の特徴と具体的な様相を考えていきたい。

#### A区

A区は他の3区に比べ遺構、遺物の量とともに多い。特に遺物は調査区北西の段落ち部分に流れ込む遺物の量が多い。これらの遺物は南側に存在したと推定される集落からの流れ込みであると見ることができる。ただ、調査区内に集落に直接関連するとみられる建物、遺構が見られないことから、集落は調査区よりもさらに南側の山際に沿った部分に位置していたと考えるしかない。その場合には現在の地形からみて調査区の南側に広い平坦部分が多く、現在の集落も谷筋に沿って細長く延びていることから、当時も現在とほぼ同様に大規模な集落が存在していたのではなく、谷あいに数棟の建物と付随する施設が散在する景観を呈していたものとみられる。

出土した遺物については、白磁、青磁等の陶磁器の類が多く、土師器片の出土量が少なくなっている。これは当時の使用量を反映しているものではなく、遺物の上流からの流れ込みの過程での風化、磨滅による減少量を考慮する必要がある。輸入陶磁器の量が多いことの歴史的背景については第2章を参照して頂きたいが、早良平野の最奥部という集落の位置関係や、集落の規模を考慮するとこのような陶磁器の量は通常のことではない。隣接する峯遺跡群第2次調査でも比較的高い割合で輸入陶磁器が出土しているが、この地域を含む早良平野南部一帯に博多から陶磁器を搬入するルートが確立していたことと、そのルートを維持する必要条件としての、この地域地盤の重要性が存在していたことをこれらの出土陶磁器から伺うことができるであろう。

覆土の堆積状況は流れ込みによる自然堆積を示すが、最下層の堆積土の上層で通常焼土坑の床面直上に堆積する炭化物層が確認され、操業時の焼土坑の床面は検出された床面より上面であった可能性がある。遺構内の被熱状況は、西壁で強く被熱している様相がみられ、東壁は被熱の痕跡はほとんどない。

遺構内からの出土遺物はない。

## B区

B区の立地状況が丘陵の斜面上にあることと、建物跡が確認できず、焼土坑が散在する状況から考えると、B区付近は集落の範囲外であることが容易に予想できる。遺構面上に造成の痕跡がほとんど見られず、焼土坑の分布も散漫で、活発な土地利用はなされていなかったことが予想できる。

## C区・D区

C、D区は扇状地上の緩斜面上に位置することから、調査以前には集落等の存在が推測されていたが、調査の結果濃密な遺構の分布は見られない。出土遺物も溝接地からの流れ込みを示す風化、磨滅の進んだ遺物が多い。これらの結果からみて、扇状地上は水田に利用される以前は空白地であった可能性が高い。

### 縄文時代の遺物について

各区で縄文時代の遺物が少量ではあるが出土している。各遺物について以下考察する。

A区SD-02出土の縄文土器破片（Fig.7 7・8）はいずれも口縁部破片で、外面に隆起文が張り付けられている。轟式とみられる。A区包含層から出土した縄文土器破片（Fig.9 33）は外面に山形文が施文されている。これらは縄文時代前期後半のものとみられる。A区で出土した石器類（Fig.10）もこれらの上器とほぼ同時期と考えられる。

B区出土の縄文土器破片（Fig.13）はA区ST-02出土縄文土器片と類似して、外面に隆起文が貼り付けられ、轟式とみられる。

また、C区で出土した縄文土器2個体（Fig.16）は埋置状況からみて同時埋置と見られる。43は精製浅鉢、44は粗製深鉢で、いずれも縄文晩期前半の様相が強い。埋置状況は相互に口縁部を接した形で上から押し潰された状態で出土しており、埋置時の正確な形態は不明だが、可能性として2個体が合口で埋置されていたということも考えられる。

C区の縄文土器も含め、縄文時代に属する明確な遺構は今回検出されていない。今後の調査課題として、これらの遺物の起点となる集落の位置を確定させることが上がってくるであろう。

### 焼土坑について

焼土坑はB区で4基、D区で1基検出されている。

前年度調査（峯遺跡群2次調査）報告（註）で、検出した焼土坑を大きく3タイプに分類した。分類基準を再確認すると、

- 1 平面形が台形または三角形に近い形になるもの、すなわち短辺の一方がみじかくなるもの。
- 2 平面形は長方形で、コーナーがはっきりするもの。
- 3 平面形は円形、または不整形。

の3分類になる。今回検出された計5基の焼土坑をこの分類に当てはめると、

- 1 B区SK-01、SK-03
- 2 B区SK-02、D区SK-01
- 3 B区SK-04

となる。焼土坑については正確な年代や各分類の型式的な変遷など不明な点が多く、今後の資料の集積、分析が望まれるところである。

（註）『峯遺跡群2』福岡市埋蔵文化財調査報告書 第618集 1999

図版1



1 A区遠景（北から）



2 A区西侧（北東から）



3 A区SD-02（西から）

図版2



1 A区SD-03 (北から)



2 A区SK-05 (南から)



3 A区SK-08 (南から)

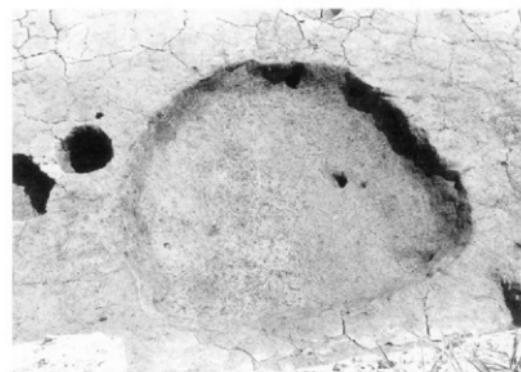
図版3



1 B区遠景（南東から）



2 B区全景（北から）



3 B区SK-01（西から）

図版4



1 B区SK-03（北西から）



2 C区遠景（南から）



3 C区全景（東から）

図版5



1 C区SX-01（西から）



2 D区全景（西から）



3 D区SK-01（北から）

# 内野遺跡

一は場整備事業に伴う内野遺跡群第2・3次調査報告一

福岡市埋蔵文化財調査報告書第653集

2000(平成12)年3月31日発行

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8番1号

印刷 高松印刷有限会社

福岡市東区松島1丁目4-10

